

夫の入院先の駒込病院まで連日のように見舞いに出かけています。最寄りのJRの駅は田端です。上野から駒込まで、山手線に乗って、私は高校に通学していました。60年余前の昔のことです。通勤とは逆方向でしたから、車両はガラガラでした。乗車時間は10分ほどでしたから、座らず、ドアのそばに立って、窓の外を眺めるのが常でした。御徒町、上野、鶯谷が台東区の駅でした。「鶯谷」って素敵な駅名だと思いました。当時は上野の山の端の陰になっているようで、緑が目には沁み込む静かな感じの駅でした。次の「日暮里」は荒川区となり、常磐線との接続もあり、線路が何本も増えます。大勢の昇降客が走って、駆け回り、急に賑やかになり、私は身構えました。窓から町工場の煙突が何本も見えて、黒く煤けていながら、元気に息づいている町の感がありました。駅名の雅な感じの「日暮里」を「ニッポリ」と読むなんて、「鶯谷」に悪いじゃないの！と思ったものです。かつてはこの辺に「新堀村」があったらしく、下町らしく、伝法な言い方が残ったのでしょうか。次の駅は「田端」です。ここは北区ですが、田端というだけあって、町もここまで、ここから先は田んぼだということだったのでしょ。山手線は大きくカーブして「駒込」へと進みますが、このカーブのところが国鉄の操車場になっていて、線路が無数にあり、作業中の電車が見えたものでした。田端駅は崖下にあり、目に入るものといえば、線路と電車でした。自動車や電車など乗り物を見るのが好きな私はいつもちらっと眺めたものでした。でも田端には降りたことがなかったのです。



そんな田端に私は毎日のように来ています。駅前に「田端文士村記念館」(左)がありますが、意外に目立ちません。駅を出て、道を左に折れると、すぐに切通となり、しばらく崖沿いに歩きます。「タバタ・アベニュー」と命名されているのに、地味です。しばらくすると商店街となり、行灯の形をした街燈がつながっています。街燈の下には「文士村」という四角い橙色の標

識がついていて、それぞれ「芥川龍之介」、「室生犀星」、「菊池寛」、「竹久夢二」など、著名な作家の名前が記されています。なんと「田端」にはかの有名な文士たちが住んでいたのですね。行灯型の街燈は風流ですが、人目を引く感じではありません。街燈の標識以外には、大正時代には文士たちがここに住んでいたと偲ぶことはできないでしょう。街燈は動坂下の手前で終わります。動坂下は文京区になり、町の雰囲気が変わります。言ってみれば下町の気さくさはなくなります。



「田端文士村記念館」を見学し、墨田区生まれの芥川龍之介は下町でなければ住みたくはなく、養父が駒込病院勤務もあったため、田端に住んだということを知りました。親友となった室生犀星が「田端は賑やかな詩のみやこ」になり「王様は芥川龍之介であった」と言ったという企画展を見ました。さっそく、芥川龍之介の旧居跡を地図を手にして訪ねてみました。田端駅南口側から

30段ほど階段を上って、崖の上に落ち着いた住宅地がありました。商店街の喧騒から離れた高台です。北にはスカイツリーがよく見えます。東南に向かってなだらかな坂の町となっていて、不忍通りへつながっています。本郷、上野には近いと言えなくもないでしょう。旧居跡はかなり広い敷地でしたが、その一部を購入し、「芥川龍之介記念館」が出来る予定と聞きました。学生時代に芥川龍之介全集を斜め読みした記憶がありますが、もう一度読みましょう。芥川は下町ツ子だったんだと思って、嬉しいです。駒込病院に入院中の夫も、同室の入院患者の言葉に、下町らしさを感じているようです。